

国際交流員のコラム

●時代を超える仙巖園の国際性●

一 鹿児島県国際交流員 スノーデン・ジョセフ(イギリス出身)

鹿児島市の西北部には、島津家の別邸であった仙巖園があります。万治元年（西暦：1658年）に建設され、仙巖園はこの350年間、桜島の下に建っており、今も鹿児島県民が誇れる宝物です。



桜島を背景に、仙巖園

仙巖園は島津家の別邸として歴史的に重要な場所であるということはよく知られている一方、数百年前まで遡っても国際的な拠点でもあったという事実を聞いたら、驚く人は少なくないと思います。仙巖園は世界に対し、鹿児島（当時薩摩藩）だけではなく、日本を代表しました。私はもっと知りたいと思い、島津家の御殿と庭園を見学させていただきました。

今回は歴史への旅でありつつ、私の旅は比較的最近建設された鹿児島世界文化遺産オリエンテーションセンターで始まりました。2019年にオープンしてから、この展示室は日本の近代化において仙巖園や旧集成館機械工場の重要な役割をハイライトしています。

反射炉は特に印象的でした。展示室には精密な復元模型もありますが、鹿児島世界文化遺産オリエンテーションセンターから数メートルしか離れていないところに、本物の反射炉跡が残っています。1857年に建設されたこの反射炉は国を守るための大砲を作るには欠かせない技術でしたが、国際的な融合の象徴でもあります。西洋技術と日本の発想力の融合。オランダの技術書と薩摩人の勤勉性の融合。反射炉の風化した石は産業的な化石でもあり、歴史的な国際交流で生まれた存在です。



錫門

当然、ここは日本の産業界の発祥地だけではありません。仙巖園の穏やかな庭園と御殿は外国の要人も受け入れました。私は朱色で彩った今も輝かしい「錫門」へ向かうと、1865年から1883年にかけて駐日英国公使を務めたハリー・スミス・パークスに思いを馳せました。

錫門が庭園の正門として使われていた1866年に、パークス公使は仙巖園で接待を受けました。「仙巖園を訪れる者は、少なくとも3年間滞在したく

なるでしょう」と記し、庭園の美しさに感動したようです。

自国のイングリッシュガーデンとはスタイルが全く異なり、仙巖園は中国庭園に強い影響を受けました。庭園の名前自体も例外ではありません。「仙巖」という部分は中国の江西省にある「龍虎山」に由来があります。

パークス公使が滞在した時期にもあった、中国デザインの特徴の一つとして、御殿の後ろにある崖から巨大な岩が突き出ており、その岩には文字が施されています。当時の日本では、岩に文字を刻むことはほとんどありませんでしたが、中国ではさほど珍しくなかったようです。仙巖園にある岩を刻むには 3900 人がかりでも 3 か月以上かかりました。岩に刻まれた文字



刻まれた岩「千尋巖」

は？「^{せんじんがん}千尋巖」の 3 文字、つまり、「とても大きな岩」。確かに、間違っははいせんが…

実は、パークス公使が訪れたときには、今も御殿の前に残っている綿密に刻まれた木製の小型あずまや、「^{ぼうがくろう}望嶽楼」で迎えられたと言われています。望嶽楼はもともと琉球国王から贈られた建物ですが、琉球王国は中国（明・清）と貿易関係を保っていたため、望嶽楼の設計には中国的な特徴が取り入れられたのも間違いありません。



島津家の御殿

私は靴を脱いでから島津家の御殿に入り、部屋から部屋へと慎重に移動しながら、パークス公使が訪れたときどう思っていたか、想像してみました。この建物は深い印象を残したでしょう。

庭園と同じく、御殿には中国文化の影響が感じられます。一例として、中庭と御殿の前にある「八角凸と八角凹」のくぼみが陰陽を表します。中国以外の文化の影響も見られます。謁見の間に設置し

てある、園内の水力発電所から電源供給を受けていたシャンデリアは明治時代にロンドンで作られたものです。なお、御殿内の展示室には、1891 年に仙巖園を訪れたロシア皇帝（当時、皇太子）ニコライ 2 世に贈呈された薩摩焼の大きな壺の複製があります。



中庭にある「八角凹」のくぼみ



ニコライ 2 世に贈られた壺



イギリス製の
シャンデリ

実際、パークス公使のほかにも、イギリス王室の方が仙巖園で迎えられました。例えば、パークス公使の訪問から約 40 年後、ヴィクトリア女王の孫息子であるアーサー・オブ・コノートは仙巖園を訪れ、島津家 30 代当主の島津忠重に接待を受けました。

そして、日本を訪問していたエドワード 8 世（当時、プリンス・オブ・ウェールズ）が 1922 年に、日本ツアーの一部として、仙巖園で日置流^{ひかりゅう}や天吹^{てんぷく}の演奏を鑑賞しました。御殿内にはエドワード 8 世一行の写真が飾られています。100 年前の写真ですが、私はちょうど同じ場所に立っており、時間によってしか隔てられていないということに気づき、感動せずにはいませんでした。

私は庭園に戻り、霧島へ向かってガタンゴトンと通過している電車の音で我に返りました。仙巖園の歴史的な重要性はさておき、この庭園は日本国内でも類を見ない場所です。当然、パークス公使が訪れた時期とは変わりましたが（当時は白くまが提供されていたとは思えない…）が、仙巖園の国際性は時代を超え、変わってはいまません。今時は外国人観光客が緑豊かな曲水の庭や川のせせらぎ、桜島や錦江湾の絶景などを楽しんでいます。



仙巖園茶寮が提供する、
鹿児島定番の「白くま」



猫神社

庭園の出口へと向かうと、猫を祀る神社に出くわしました。そこに掛けられていた絵馬には、世界中から来たたくさんの人々の祈りや願いが、様々な言語で書いてありました。私には読めないメッセージもたくさんありましたが、それにしても、絵馬に書いた人々は私と同様に、仙巖園に対して畏敬の念を抱いていたと感じました。

私は目の前にある言語や文化の取りまとめに対し、思わず微笑みました。時代を超える仙巖園の国際的な魅力の象徴として、これ以上はないでしょう。